

常に希少性追求のモノづくり

山口ナット



株式会社山口ナット
創立100周年記念式典

参加者による記念撮影

（株）山口ナット（本社＝東京都墨田区石原4-31-7。山口誠一社長）は、創立1924年以来、真鍮並びに金属加工における独自の加工技術確立等を通じ、軸輻（アクリル）、切削、冷間圧造と時代の潮流に応じた製造方法の進化及び高度化を図り、常に希少性を追求した企業競争力並びに対応力の強化に努めてきた。現在は自動車向けの多彩な特殊パーツ類を主力に安定生産供給をおこない、製品アイテムそのものに加えて、業務姿勢等を背景に納入・協力の各取引先との間でベストパートナーとして深い信頼関係を築き上げている。去る11月16日には、東京都江東区東陽のホテルイースト21東京において「創立100周年記念式典」を挙げる。社内行事とし、山口社長、山口昌利会長夫妻をはじめ現役社員、OB諸氏、旧知の協力関係者など合計四九名が出席。永きにわたる輝かしい社歴を振り返ると共に、次の百年に向けた取り組みを掲げるなどして、山口社長は「希少性、そして当社の根幹である技術及び市場を含めた新規開発を再認識のもとにその進みは緩めず努力を続け、常に当社並びに自らに関わる人達に感謝をし、我が国の発展に繋がる会社となることを理念に、一世紀企業に相応しい姿へと成長し次の時代へ展開を目指していきたい」と今後の方向性を示した。

記念式典は、山口会長夫妻の入場を出席者全員が拍手で迎えて14時に開始され、宮城達朗営業部長が司会進行。開式にあたり、山口社長は当日の出席と大きな区切りを無事に迎えられたことに感謝の意を表してから、三代にわたる創業者の山口少多氏（ロク口職人から真鍮切削ナットの量産体制を築く）、山口会長（切削から圧造へナットの工法転換、埼玉工場開設後は標準品主体から特殊品への移行を徹底）、同氏（さらなる製品の高度化の追求と市場の多様化推進）の運営体制別に纏めた主な業務内容を含めた同社の歩みが節目並びに転換期などとなる出来事を織り交ぜながら、現在の強固な礎を蓄積してきた100年

間におよぶ軌跡に関して説明がおこなわれた。また、企業変遷を解り易いように50年前と比較した業績推移、海外製造拠点のフィリピン工場の現況、100年変わらなかつたこと、100周年目の外部環境、これから100年に向けての課題、国内製造拠点の埼玉工場投資完了などの要点が発表され、全社一丸による課題解決と他の模範となる一世紀企業としての確立に取り組んでいく旨を併せて別掲の内容による挨拶をおこなった。つづいて乾杯首領では山口社長が「皆様の益々の御健勝と、当社これからの100年に向けての発展を祈念します」と述べ、祝宴に入った。会場内では、個々には異なるものの山口ナット

において業務に従事し、現在も進行形である一人一人の大きな節目の機に對する思いや、今後の成長に向けた個別の抱負を抱いての希望に満ちた姿や、また、OB諸氏との久しぶりの再会に喜び合う場面など穏やかな雰囲気の中に包まれるなか、ステージ上の大型スクリーンに記念に制作されたビデオ「ものづくりの原点に帰る」が放映された。祝賀ムードが会場内いっばいに漂う中で、山口会長が登壇して創業者であり父の出身地、同社の起業、戦後復興による再出発から発展、取り巻く環境の変化と対応などに触れる別掲のインタビュー内容も併せて今日までの道のりを振り返るなどして「企業経営、これまでの基礎となった恩人は多く、教えて頂いた一つ一つの言葉が財産です。順風満帆ではなく困難の連続でしたが、業界内外の多数の方に大変お世話になったことに改めて御礼を申し上げ、そしてこの場に居られるのも長年にわたって支えてくれた家内への感謝をしておきます。今後も、山口ナットが盛り上がるように宜しくお願いします」と語った。

成長する一世紀企業

山口社長挨拶要旨

2005年から運営を任されて本日を迎えるにあたり、100年という時間の中でこれまで沢山の方にお世話になってきたことと感謝の気持ちでいっぱいでありたい。社会、経済的にも色々なことが起こり変化もしてきましたが、特にリーマンショック時には財務体質の見直しをおこない、キャッシュフローに移管させた筋肉質への経営への着手し、会長の言葉である資金の重要性を再認識しました。現在の山口ナットは、50年前の売上と比べて30年間で6倍に到達しましたが納得する数字ではなく、過去の最高売上を一つの目標に回復をさせていきます。総資産は大きく増加しており、2014年にオペレーションス

組みを盛り込み、更なる活躍・発展を祈願しての祝辞を述べた。歓迎の時間が続いて、山口社長、山口会長夫妻に対して社員から感謝の気持ちを表しての花束贈呈がなされた。最後に、同社顧問の遠井広道氏が「大正から始まり、いまの令和と4つの年号を歩んで100周年があり、長い期間に様々なことを乗り越えてきたのが山口ナットです。昭和のスーパースターの名言を

向けての課題として技術開発の継続、技術伝承・育成、人手不足前提の生産体制、新技術（工法）の導入による市場の多様化をはかる、社内コンセンサス（一体化）可能な状態への経営・上層部の意識改革があげられ、着実な取り組みの基に成果を求めて参ります。主力製造拠点国内の埼玉工場は敷地面積約七千八百坪、建屋面積約三千八百坪の規模を有し、浸水リスク除去及び再生エネルギー化対応などもおこない、建物投資はほぼ完了となつて既存事業拡大・高付加価値化への深堀に加え、周辺新規事業への挑戦・取込を考え、挑戦していきます。希少性の追求を維持して、技術及び市場を含めた新規開発の力は緩めず当社の根幹と認識し努力を続けていきます。決してゆでガエルにならないようにする一を自らの目標とします。これは、多彩な特殊品の受注

借りまして、山口ナットは永久に不滅です」と語り、次の100年、200年を目指しての新たな船出に華を添える三本締めがなされ、出席者全員での記念撮影をおこない、終了となった。増加傾向を背景に順調な業績があげられ、努力を惜しんだ時期の僅かな気の緩みによって成長の鈍化が生じたことを真摯に受け止め、成功しても現状に甘んじず次の一手次の行動を起こし、また失敗してもその反省が今後に繋がるように皆さんと共有していきます。常にお客様、仕入先様、地域の皆さん、家族に感謝をし、我が国の発展につながる会社となることを経営理念に維持し、活動します。社員の皆さんにとって100年企業で働いている実感、捉え方は、個人個人によって異なり、ハッキリと明確に表すことは難しい気もします。当社の永年にわたる当たり前の活動は、他からみますと大変価値のあるもので、100年の歴史を刻んできた会社として誇りをもち、一世紀企業に相応しい姿への成長と展開を目指していきたい。

進化の歴史語る

会長 山口昌利氏

山口昌利会長に一世にわたる社歴において、主な創業からの出来事や自らの体験も交えて語って頂き、その内容を以下に紹介します。

父である山口少多が関東大震災発生の翌年、1924年に未だ焼け野原であった墨田区東駒形で輻輳(ロクロ)による金属挽物で起業したのが始まりです。昭和に入り、現本社の墨田区本所厩橋にて事業を拡大し、のちに独立して同業者となる数社を含めて10名程度が働いていました。しかし、大不況に伴う仕事減少から、従業員の生活を守るために真鍮ナット専門生産に切り替えをおこない、在庫は積み上がりましたが何れは販売できると考えた対応でした。

1937年に次男として私が生まれました。1942年に開戦し、終戦を迎えて以前の取引先からの再開要望も受け、1948年に現本社の隣接

共に製品外観などで高評価を得ていた背景が10台の自動機新設の決定材料になりました。

その評価は、同じ切削加工であっても、技術力、独自の工法、設備改造などを含めた創意工夫、顧客ニーズを満たす

1974年に米国ナショナル社見学の際に冷間圧造の威力を目の当たりにし、1975年に当社第1号機の城東機械製ナットフォーマーN4型の導入を決定しました。真鍮材料メーカーとの間

冷間圧造機に求める当社の取り組みを実現していくには課題もみられ、仲間内から譲り受けた阪村機械製作所製の中古機が具体的に良好な結果を表しました。

埼玉工場は、以前より確保していた久喜インターチェンジ近くの所有地の売却に伴い、将来的な展望を見据えた準備の代替地として取得したのが現在の工場地になりました。本社工場周辺の住宅化が進み、今後の業務拡張などを含めて取り巻く環境から、1988年に開設。その半年後に現社長の山口誠一が入社しています。

先述の語に戻りますが、今後の山口ナットが展開していく上で阪村機械製作所製のフォーマーは主力生産設備、必要不可欠に位置付けられるとの思いから、現社長には入社条件に阪村機械製作所での修業に励むことを掲げました。本人は、私の母、祖母から三代目の事業継承を言い伝えられておりましたので、私の言葉よりも先に決心を固めていたようです。

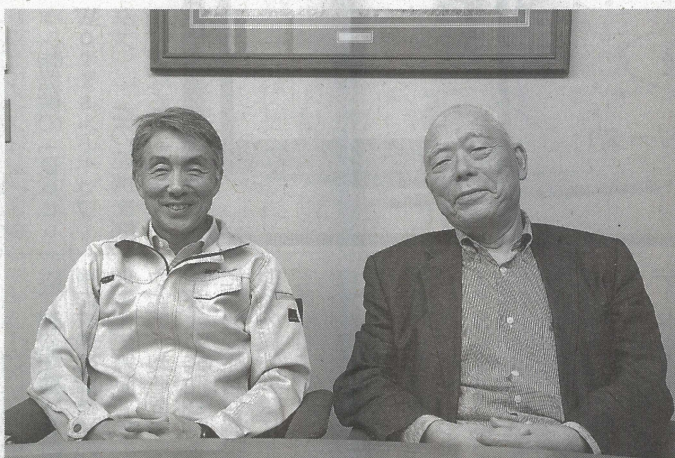
当社は、ナットフォーマーの改造機を所有して一般的なアイテムに加えて特殊品の生産をおこなって他社との差別化を図っていましたが、標準仕様機においても独自の発想に基づく金型設計及び工程設計、更には培ってきた生産実績やノウハウなどを駆使すること

で、機械が備える能力を最大限に発揮可能な冷間圧造加工による製造体制のモノづくりを構築しています。専用パーツフォーマーの性能には至りませんが、ナットフォーマーであっても複雑形状品生産を実現する独自性の強化が図れています。

阪村機械製作所さんで現社長が学ばせて頂いたことは大きく、修得した内容や経験はあらゆる面で社内共有化及び浸透、有効活用がなされてその効果がみられています。

更に、フォーマーよりも2タイプ3プロのほうが生産に適したアイテムなどもあり、常に最適化となる方法の検討、実行に取り組んできました。また、各機械が有する能力を限界以上に発揮させるためには機械そのものの改造と併せて、工程ごとに関わる金型も高い重要度を占めており、内製化技術が培えたのは大きな力になっていきます。

現在、このモノづくりに対する姿勢、意識、熱意は社内に深く根付いていることが感じられ、今後も追求していくものと願っております。



右が山口会長、左が山口社長

モノづくりが裏付けたものと思っております。さらに、生産効率・安定生産を目的に材料の自動供給装置、自動給油機などを設置、自動給油機などを専門メーカーにオーダーメイドし、附帯させて個別仕様の自動機が稼働し

で、圧造しても割れずタツプも切りやすい専用材料の開発にも着手。1976年に社長就任。1979年に隣接の旧工場跡地(敷地面積五〇坪)に4階建ビルを建設。城東機械増設の一方で、